

現代のガリレオ処分を許すな！

自由に科学的真実を 追求・研究できる環境を 日本に

4人の日本人がノーベル賞を受賞し、日本中が湧いたのは記憶に新しいと思います。しかし、4人のうち2人はアメリカに移住してからの業績であり、科学者が世界に通用するような一流の研究に没頭できる環境を日本に整えることが急務となっています。そんな中、そのような願いと逆行するような「現代のガリレオ・ガリレイの抹殺」とも言える残念な事件がありました。

筑波大学教授でプラズマ研究センター長を務めていた長照二さんが本年3月にその職を解任され、9月には筑波大学より懲戒解雇の処分を受けました。また、彼の研究グループの3名が10月に大学から停職4カ月から1カ月の処分を受けました。

その理由はこの研究グループが執筆権威ある科学誌 Physical Review Letter に発表した論文に「データの改ざん」があったとするものです。しかしながらこの事実については、この間、長教授が「改ざん」でないことを別の論文で明らかにするとともに、世界のプラズマ研究者からも同様の意見と大学の措置に対する抗議の声が寄せられています。

それにもかかわらず大学は懲戒解雇・停職を強行しました。長教授はこれに対して解雇撤回の提訴を起しました。

筑波大学の今回の処分には多くの疑問・疑惑があることから、私たちは長教授はじめ彼の研究グループを支援して、処分撤回・原職復帰・名誉回復を勝ちとるため活動を始めました。

科学的な真実を追究する科学者が、理不尽な圧力で葬り去られよ

うとしています。それはあたかも真実を曲げることを強要され「それでも地球は回っている」とつぶやいたガリレオ処分の現代版です。私たちは今「現代のガリレオ処分を許すな！」を合い言葉に運動をすすめます。皆さんのご支援をお願いします。

科学的調査がなされたか？ 世界の科学者からの声届く

今回の一連の告発・処分の流れの中で筑波大学の奇妙とも思えるような行動が目立ちます。その例をいくつか挙げてみましょう。

● 大学は「改ざん」の認定、処分は筑波大学の関連研究科の事情聴取から始まり、研究公正委員会、教育研究評議会において適正な手続ですすめられたとしています。

しかし長教授グループへの告発・調査・審理、そして処分に至るまで、一貫してM副学長の積極的な強い関与が認められます。

例えて言えば誘導尋問を含む取り調べを行う警察、検察、裁判官その全てを一人の人間がリードし行っているということです。

● 長教授が「改ざん」告発に対す

長教授らを支援する会ニュース

NO.1

■ ----- 発行人

(仮称) 長教授らを支援する会準備会

■ ----- ホームページ

日本語版 <http://cho-teruji.org>

英文版 <http://www.cho-teruji.net>

連絡先：神奈川県高等学校教職員組合内

る科学的な詳細な反論を別の米国物理学協会の専門誌 (Physics of Plasmas) に発表しようとした際に、大学執行部に属する者が、編集者に対して掲載許可への実質的見直しを要請しました (この雑誌の編集者は厳しい4名の専門家による異例の再審査の上で、この要請を退け、原文のまま論文を掲載した)。しかも、この論文をもって大学に再考を求めたところ「調査結果は既に出ている。調査委員会は既に解散した。」との理由で拒否されています。

● 研究公正委員会調査委員会は外部の専門家3名を含めて構成されています。

しかしその外部の専門家の3名すべてがプラズマ研究ではトーラス型を支持する研究者ばかりで、長教授が進めていたミラー型の研究者は一人も含まれていません。この点を指摘された大学当局は「ミラー型の専門家は日本にはいない」と返答しましたが、実際にはミラー型をよく知る専門家が何人もいます。

また、本件の争点はこうした専門家でなくとも、関連常識さえあれば、誰にでも判断できると言い、大学側を「学術論争に持ち込もうとしている」という、本来大学が果たすべき学術議論を拒否する、にわかには信じがたい弁明を行っています。

● 長教授に対する告発・解任・処分に対しては、問題となった論文を精査したロシア科学アカデミー、アメリカ物理学会などの世界的な研究者から大学当局に対して厳しい抗議

と要請が寄せられています。しかしながら大学当局はそれに応えることなく処分を強行しました。

プラズマ乱流が制御されたデータが「改ざん」疑惑に

長教授らの論文は、「外部からマイクロ波を照射することで、プラズマ乱流を一定程度制御することが出来た」という論文です。大学当局はこの論文の結論について何ら触れることなく、その例証のために用いた二つの実験データのグラフが「改ざん」されたと主張しています。

しかし大学当局の主張が論文の主旨を外れた枝葉末節に対しての、科学的判断とはいいかねる「口実」のようなものにすぎないことは、こうした世界の専門家の指摘を待つまでもなく明らかです。

● 長教授らは、プラズマ乱流が制御されたことを示すために、何回かの実験（ショット）のデータを再現性のチェックを兼ねて活用しています。これに対して大学当局はデータの混用との指摘をしていますが、このデータは、どのような方法で検証しても、どのデータを用いてもプラズマ乱流が制御されたことを示すことができます。つまり、データの混用という判断は、科学的に理解しきれてない判断だということです。

● また大学当局は別の表で解析方法（データの読み方）に意図的な誤りがある、との指摘を行っています。解析方法には、様々な教科書に明記されているように未だ定説はなく、考え得るすべての解析方法を用いてもプラズマ乱流が制御されたことが証明されています。

これらのことは世界の専門家たちが長教授らの論文を高く評価していることから明らかといえます。

科学は真理を追究するもの

長教授は、この研究はトラス型でも応用が出来るものであり、これからの成果を活用して研究者が切磋琢磨しながら夢のエネルギー源であるクリーンな核融合に向けてすすんでいければいい、と考えています。科学は真理を追究するもので、真理の前には功名や個人の名声は些末な問題と考えています。日本の科学と科学者の研究環境のためにも、

* 次回公判

日時 2009年1月19日(月)
午後4時より
場所 水戸地裁土浦支部
ぜひ傍聴してください。

理不尽な「改ざん」疑惑に断固として闘う決意を固めました。

科学者が自由に研究できる環境を「支援する会」結成

私たちはこのような大学当局による理不尽を許さないために「長教授らを支援する会」を立ち上げようと考えています。

当面以下の日程で公判及び結成集会を開催しますので、多くの皆様のご参加を御願ひ致します。

* 支援する会結成集会

日時 2009年2月7日(土)
午後2時～4時
場所 つくば国際会議場
会議室(405)

■コラム■ プラズマって何？

物質は全て原子で出来ています。原子は原子核と電子が結びついて出来ていますが、物質を高温に熱すると“原子核”と“電子”とに別れ、特に水素では、電子とプラスのイオン（陽子）がばらばらになった状態（電離）が生まれます。この高温電離状態が「プラズマ」といわれるものです。

プラズマ状態の中ではイオンは高温になっているため高速で飛び回っており、通常では簡単には制御出来ない状態になっています。これを制御しながらさらに高速にすることで、イオンとイオンを一定以上の速度で衝突させて、「融合」させることができ、そのときに膨大なエネルギーを生み出すことができます。これが核融合で、太陽が燃え、星が輝き続けている原理そのものです。

核融合を実現するためにはプラズマを制御することが不可欠

ですが、そのための方法として現在考えられているのがミラー型（直線型）とトラス型（ドーナツ型）、さらにレーザー型等です。日本では従来様々な方法が工夫されてきましたが、様々な論議の末に03年にはトラス型を中心に開発することが政府の方針で決められたものの、長教授のミラー型実験装置（筑波大学のGAMMA10）を使っている研究で、プラズマの制御についてミラー型で一定の成果があげられることが確認されました。

今回「改ざん」といわれた論文はそのことを世界で初めて明らかにしたものでした。この論文の結果アメリカでもミラー型に対する見直しがすすめられています。

長教授らはこのような巨額の予算の争奪を伴う争いの渦に巻き込まれたと考えるのは考えすぎでしょうか。